社会貢献の功績

- 精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧、幸福のために尽くされた功績
- 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- 海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績

池谷　修／ミャ　ケイ　ティイ（テレサ）

ミャンマー

池谷夫妻は、長年日本とミャンマーの良好な関係作りに貢献している。テレサ夫人は、慈善活動中に出会ったヤンゴンのメリーチャップマン聾唖学校の中に職業訓練を兼ねた美容院を設立。これまで職業訓練は調理師やマッサージ師など、主に男子生徒のためのもだったが、女生徒の活躍の場が増えることになった。美容院では、日本並みの徹底した接遇の従業員訓練を受け、質の高いサービスを提供している。美容院と共に、敷地内には教員の寄宿舎、図書館、寮、食堂を私費で建設した。　（推薦者：岩田　宏美）

11月末の帝国ホテルにおけます公益財団法人社会貢献支援財団様ご招待による表彰式に私ども夫婦が出席できる機会に恵まれ、安倍昭恵会長様はじめ皆様方から心の篭ったお持て成し頂き、生涯忘れることのできない喜びと感動で一杯であります。

私どもの孫は、安倍昭恵さんに会えるのならと、11月27日の学校を休んで表彰式に出席したほどの喜びようでした。

表彰式では、恵まれない人や貧困に苦しむ人たちを支援してくださっている多くの方々を知ることが出来、私どもにとっても大変な励ましとなりました。

私ども夫婦は日本を離れ、ミャンマーの地で滞在すでに30年を経ましたが、ミャンマーと日本は似通ったことが多くあり、特に治安の良さ、知らぬ他人にも優しい、思いやりある国民という共通点があり、特に、私（池谷修）が育った50年～70年前の日本は今のミャンマーにそっくりであります。

私どもはミャンマーにてこの10年ほど前から聾唖学校であるメリーチャップマン学校に宿舎、図書館、食堂等の寄贈して参りましたが、最近はこの校内に美容室（MUDITA、慈悲という意味です）を建設し、職のない或いは今後職に就けないであろう聾唖の女子生徒に美容の技術を教え自分の脚で歩けるよう指導し、美容室も他の美容室に負けない清潔さと技術を提供しています。

私ども夫婦は齢72と68でありますが、このMUDITAの美容師の元気な明るい笑顔と澄んだ瞳を見ると、すべての疲れを忘れ、単なる慈善活動、寄付行為を超えた、綺麗な花園にわが子と遊ぶ夢を感ずるのです。

私ども夫婦は今後とも優しいミャンマー人に囲まれ、MUDITAを支援しながら、 この地に住みますが、やがては、この地でその人生も終わるのでしょう。しかしこのMUDITAは末永く活動し、多くの聾唖の生徒たちの糧となって行くでしょう。そのように祈っています。

社会貢献支援財団の皆様、何かの機会がありましたら、是非 MUDITA にきていただき、HAIR TREATMENT、マニキュア、ペディキュアを楽しんでください。

お待ちしています。

池谷　　修

▲美容室 MUDITA 前で

▲マニキュア・ペディキュアを施すスタッフの様子

▲ヘアトリートメントを施術中

▲ろうあ学校先生の寄宿舎

▲図書館

▲食堂

岡本　昌宏

セリエコーポレーション代表
NPO 法人なんとかなる代表理事

神奈川県

神奈川県横須賀市で2004年から児童養護施設や少年院等を退所後、受け入れ先のない青少年を、自身の会社（とび職）で雇用してきた。しかし、受け入れた青少年の多くが入社から２年の間に離職しており、その原因は「仕事の理想と現実とのギャップ」にあると考え、とび職以外の職場を体験できるよう選択肢を増やし、学習支援なども加えて多方面から自立を支える体制を整え、2016年に「NPO 法人なんとかなる（以下、なんとかなる）」を設立した。「なんとかなる」では寮母さんのいるシェアハウスを運営し、衣食住を提供して職業訓練や学習支援を行い、施設利用終了後も継続的に支援を続けている。現在、児童相談所一時保護所、少年院、鑑別所、刑務所等から９名継続中。

（推薦者：梅本　和正）

私は13年前に土木・建築工事を行うセリエコーポレーションを設立しました。そして児童養護施設・少年院・刑務所を出た人たちを積極的に雇用し、社会復帰までのサポートを行ってきました。これまでに、「鳶職の仕事・住まい・親代わり」の３点セットで支援した人数は60名以上にのぼります。

鳶職は重労働なだけでなくとても厳しい仕事です。しかし一度手に職をつければ、安定した収入に結びつきます。努力し継続すれば、必ず実を結ぶ仕事です。

私は出所した人たちにこう伝えてきました。「罪を忘れてはならない。しかし償ったら誰でも同じようにチャンスがある。そして手に職があれば、どこへ行ってもやっていける。頑張れば社長にだってなれる」と。

しかし支援の道のりは、決して平坦なものではありませんでした。一旦は受け入れたものの、仕事がきつくて長続きせず、継続支援できなかったケースが数多くありました。またスマホが普及した社会で、「短時間で高収入」の言葉を安易に信じ、振り込め詐欺等の再犯に至るケースが後を絶ちませんでした。私は鳶職だけにとらわれてはいけないと考えました。

そこで、さまざまな職業の可能性を模索しながら個々に合った仕事を探し、同時に生活面の支援も行えればと、2016年 NPO 法人なんとかなるを設立し、「鳶職だけではない仕事・住まい・親代わり」の３点セットを提供するシェアハウス５カ所を運営するに至っております。

NPO 法人なんとかなるでは、鳶職が合わなくてもシェアハウスに住んだまま、別の職場を体験できる仕組みづくりを進め、介護施設・不動産会社等に受け入れてもらう体制づくりを整えました。また IT 企業、飲食店等の協力も得られ、３日から半年間、本人が納得のいくまで職場体験のできるシステムを作りました。そして本人が合わせ

られる仕事が見つかり雇用に至れば、シェアハウスに移る流れをイメージし、中間支援施設の運営を開始しました。中間支援施設では、調理スタッフと寮母が皆の生活を支えています。そこでは、職業の選択肢を増やせるよう、元教師らがパソコンを教える学習支援面のサポート体制も兼ね備えるなど、その人らしさを大切にした支援を行っています。

さらに2018年には、児童養護施設を退所した子どもたちの社会的養護を担う「自立援助ホーム」の運営を行います。

まだまだ試行錯誤は続いていますが、児童養護施設・少年院・刑務所等を出た人たちに対し、切れ目なく淀みのない社会的システムを作っていきたいと、私自身、日々努力邁進しております。サポートに係わった人たちが心を込めて支援することが、再犯を防ぐだけでなく、本人のよりよい幸せにつながると信じています。

このたびは大変栄誉ある賞をいただき、本当にありがとうございました。これからも、偏見なく誰もが住みよい社会づくりに貢献してまいります。

日々ご安全に!!

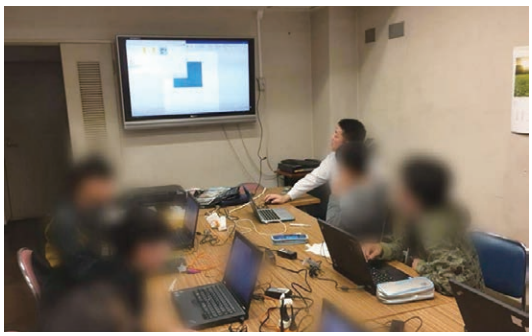
岡本　昌宏

セリエコーポレーション：http:// 鳶セリエ .com/

NPO 法人なんとかなる：http://nantokanaru.jp/

▲2017年３月、養老孟司先生と岡本代表は法務省を通じて、全国52ヶ所の少年院に、先生の著書『ばかなおとなにならない脳』を寄贈しました

▲職場の様子　「住まい、とびの仕事、身元保証」の３点で雇入れ



▲パソコン教室の開催

▲馬堀シェアハウスの見学会

社会福祉法人　ストローム福祉会　エリザベス・ストローム記念　山王こどもセンター

大阪府

大阪市西成区山王にある児童館。1964年にエリザベス・ストローム宣教師が同地区の自宅でこどもを預かり保育したのが始まり。同宣教師の帰国後、1983年に山王こどもセンターに改称し、学童保育活動を行うようになった。一次は財政難で閉鎖が決定されたが、保護者や支援者からの出資金で土地と建物を買い取り自主運営を始めた。1996年に社会福祉法人となる。利用料は原則無料で、幼児から大人まで、障がいのあるなしに関わらず、誰でもいつでも利用することが出来る。こどもたちの安全で楽しい放課後を守り、保護者が安心して就労できるよう地域の中に開かれたみんなの広場として運営している。

（推薦者：生田　武志）

施設長
前島　麻美

第49回社会貢献者表彰にあたり、私たちの「社会福祉法人ストローム福祉会エリザベスストローム記念山王こどもセンター」を選んでいただき感謝申し上げます。

山王こどもセンターは1964年にドイツ人のＥ・ストローム宣教師が自宅でこどもを預かったことから始まりました。家庭保育の家、西成ベビーセンターと名称を変えながら1985年には活動母体であったルーテル教会から独立し、1996年に社会福祉法人となりました。いつもどんな時も支えてくださるたくさんの方に恵まれ現在があります。

「あいりん地区」でこどもたちと向き合い、今必要なこと、すべきことを活動指針とし、こどもたちには集団で過ごす中でいろいろな経験や知識を積み重ね、社会の中で自身を見つめ自分の考えをもって自立できるようになって欲しいと願っています。

2017年７月から始めた「永信食堂」（地域の防災会館で月２回開催のこども食堂）はこどもたちだけでなく誰でも立ち寄れる食堂、その中でいろいろな人と触れ合える場所にしたいと思っています。当初は20食程度でしたが最近は80食を超えています。助成金なし、人材もすべてボランティアに頼っていたので今回支援いただいた賞金の一部でより良い活動を続けることができます。本当にありがとうございます。

11月の式典には職員２人、こどもセンターOG2人で出席させて頂きました。普段できない贅沢な時間を過ごすことができ、少々舞い上がりつつこのような機会をいただき感謝しております。また関東在住のセンターOGや元スタッフとも再会でき本当にうれしい楽しい時間となりました。

社会貢献者の表彰というものの、私たちも共に成長していけるこどもセンターの活動であり、いつも周りの人に支えていただいていることをありがたく思います。

これからも利用者と地域のニーズに応えながら、こどもセンターらしく歩んでまいります。ありがとうございました。

施設長　前島　麻美

▲こどもセンターの前身　西成ベビーセンターと創始者ストロームさん

▲30周年記念と感謝のつどい

▲夏キャンプ

▲30年前のこども達　昭和やなぁ～

▲こども食堂はじめました

▲今のこども達　水遊びをしているところ

特定非営利活動法人　NPO Baby ぽけっと

茨城県

2004年から茨城県土浦市を拠点に、予期せぬ妊娠を強いられた女性が、産んでも育てられない赤ちゃんを、子どもに恵まれない夫婦へ特別養子縁組する仲介事業を行っている。女性からの相談は無料電話相談で応じ、母子寮も用意して安心して出産できる体制を整え、これまでに322組の縁組を成立させてきた。

（推薦者：矢満田　篤二）

代　表
岡田　卓子

この度は田舎の小さな団体にこの様な栄誉ある賞を頂きありがとうございました。

昨年表彰を受けられた愛知県の赤ちゃん縁組の先駆者である矢満田篤二様より、表彰式と祝賀会のご招待を受けた際、まさかその翌年に自身が同じ場所に立つ機会を頂けるとは夢にも思いませんでした。

自分自身が表彰される立場となった時、まさかと言う驚きの気持ち、そして喜びと共に、今まで当会の活動を理解し支えとなってくださった皆様、そして推薦して下さった矢満田様に感謝すると同時に、これからも驕らず、粛々と日々の活動を続けていき、一つ一つの命、そして縁組家族と向きあっていきたいと思っております。

当会は2010年６月に設立、当初は愛知県の名古屋市に本部を置き、第二種社会福祉事業として活動をしておりましたが、2012年６月に役員交代を機に、役員の多い茨城県に本部を移行し「特定非営利活動法人」として申請・受理され現在の事業形態となりました。

当会は予期せぬ妊娠や経済的事情で産んでも育てられない女性の産前産後の支援、そして不妊治療などの努力をしても実子を授かることのできなかったご夫婦の「どうしても子育てがしたい」という願いを叶える為、特別養子縁組の仲介・サポートを行っている団体です。2017年12月現在、352人の赤ちゃんが新しい家族の元へと託されました。

当会の特徴として第一に関東・関西に無料で滞在できる母子寮・シェルターを１か所ずつ所有しており、希望する女性は母子寮・シェルターに滞在し、出産まで協力病院にてサポートを受ける事ができます。

相談者の多くが経済的に困窮していたり、様々な事情により地元での出産が困難な事が多いため、身一つですぐに移動して来られる母子寮・シェルターの存在は大きく、利用者は絶える事がありません。

母子寮・シェルターは産前だけではなく、産後帰る場所も仕事も失った女性が自立

する為、就職活動や新居探しをするために滞在する事もあります。

第二の特徴が、当会は代表を始めとするスタッフの多くが、養子縁組の当事者であることです。養子縁組後の家族、里親をサポートする立場の者、そして過去に実子を養子に出した経験のある生母等で成り立っています。当事者だからこそ素直に喜びも悩みも苦しみも悲しみも共有しあえると思っています。愛の絆で結ばれた家族がどれほど幸せかを知っているからこそ、我が子が温かい家庭で育つ幸せ事を知って欲しいとの願いから、幸せな家族の姿や実親の手放す苦悩を知って欲しいため積極的にメディアへの協力も行っています。

中でも愛知県名古屋市に本部を置いていた時からお付き合いの始まった中京テレビとはドキュメンタリー、ドラマで過去それぞれ４本の番組を制作、放送していただきその度に大きな反響を頂いています。

また当会では子供の出自を知る権利を重視しており、年に１度真実告知のシンポジウムを開催しています。シンポジウムでは既に真実告知を行った家族の体験談発表、出産後努力して立ち直った生母との再会の場所ともなっており、毎年10組ほどの家族が再会に感動の涙を流しています。

普段は全国をブロックに分け、近い地域での交流を行っていますが、全国の家族と交流のできるシンポジウムは皆心待ちにしている一大イベントです。500人を高い脚立から見下ろして撮る集合写真は当会の名物でもあります。

近年はダウン症などハンディキャップのあるお子さんの養子縁組も増えましたが、大きな愛のある温かい家庭に迎えられて大きく成長している姿を見せてくれています。皆様に沢山知っていただきたい事があり、ここには書ききれない事もまだまだあります。ホームページに沢山の写真や情報を載せていますので、幸せな家族の姿をご覧いただけますと幸いです。

このありがたい賞を頂き末裔までの宝物にさせて頂き、今後益々活動に力を入れて頑張りたい思います。

安倍会長はじめ社会貢献者財団および関係者の皆さまありがとうございました。

代表　岡田　卓子

▲2017年６月　毎年６月に開催される「真実告知のシンポジウム及び懇親会」記念写真

▲2017年９月　新しい母子寮が完成しました

清田　悠代

NPO 法人しぶたね代表

大阪府

心臓病の弟がいた経験から、病気の子どもに面会する親を、病院の廊下でひとりじっと待つ“きょうだいたち”にも心のケアが必要と感じ、日本ではまだあまり注目されていなかった、“きょうだい”を癒す活動に取り組んでいる。米国では病気や障がい等、特別なニーズを持つ子どもの“きょうだい”のケアが日常的に行われている中、日本ではまだ、そういった子どもたちは置きざりにされているのが現状。病気を患う子ども、その“きょうだい”、親、みんながそれぞれに家族に申し訳ない気持ちを持ち、遠慮し気を使っている。子ども時代の経験が性格にも影響を及ぼし、大人になっても心に傷を抱え、自己肯定感が低かったり、生きづらさを感じて精神科にかかるなど、更なる問題を発生させることもある。清田さんは、「NPO 法人しぶたね」を立ち上げ、病院で“きょうだい”と過ごしたり、彼らが主役になり親やボランティアとあそぶイベント、支援者に向けた研修や講演などを行っている。

（推薦者：認定 NPO 法人　病気の子ども支援ネット　遊びのボランティア）

このたびは身に余る大きな賞を賜りありがとうございます。前日の懇談会や授賞式を通してすばらしい方々のご活動を知り、熱い心を持ちながらも柔らかい物腰のみなさまとお話できたこと、宝物の経験になりました。

中学生の時に弟が入院する病院で見た光景が、私の今歩く道を決めました。感染予防のために病棟に入れない小さなきょうだいたちは、保護者の方が入院中のお子さんに面会される間ずっと、何もない廊下にぽつんと座り、何時間も過ごしています。２、３歳の女の子が母親を求め泣きながら、それでも病棟と廊下を隔てる扉の先に行ってはいけないことを理解しているので扉を開けようとはせず、ただ泣きながらじっと張り付いていました。こんな小さな子が泣いているのに誰にも声をかけられることもない現実にふれ、中学生の私は大きなショックを受けました。その気持ちから、大学では社会福祉を学び、きょうだい支援先進国である米国で広く開催されているきょうだいのためのワークショップを日本でも行うため、2003年ボランティアグループ「しぶたね」を立ち上げました（2016年 NPO 法人格取得）。病気の子どものきょうだいたちが主役になり、仲間と出会い、大歓迎され、安心の空気の中であそびきること。背伸びをして大人みたいになって頑張っているきょうだいたちが、楽しくあそぶ中でふとかかとをおろして等身大の子どもに戻っている瞬間を増やしていくこと。そんな場を目指して、たくさんの人が力を貸してくれました。病院の廊下の活動では、11年で延べ900人以上のきょうだいとあそぶことができました。

きょうだいたちが抱える不安や寂しさ、自責感、プレッシャーなどは大人になってからの性格や人生観にも大きく影響しますが、子ども時代を安心の中で過ごした経験が生きづらさの軽減につながること、きょうだいに出会う人はみなきょうだいの支えになれることを、大きくなったきょうだいたちが教えてくれています。

病気の子どもの親御さんは、24時間365日休みなく病気の子どもの命を守りながらきょうだいにも心を配り頑張っておられます。その親御さんを見ておられる支援者の方々もきょうだいのケアについて一緒に悩んでおり、そんな方々の要請を受けて、これまでの経験やノウハウをお伝えする研修ワークショップ事業を昨年から始めました。全国にきょうだい支援のたねを蒔いていきます。

受賞された方々のご活動をうかがい、つらいことが起こってもきっと誰か支えてくれる人がいる心強さを感じました。家族が病気になっても自分らしい人生を送ることが当たり前に守られる社会になるように、私も自分の人生の時間をきょうだいたちの安心のために使いたいと思います。ありがとうございました。

▲“きょうだい”たちのために活動する清田さん

▲きょうだいとあそぶボランティアさんたちシブレンジャーです

▲きょうだいの応援団を増やす研修の様子です

▲きょうだいの日一番人気の風船サッカーの様子です

▲病院の廊下にマットを敷いて看板を出し、きょうだいたちとあそびます

▲親子でスーパーの袋を使ってうさぎ風船を作っています

中嶋　將晴

兵庫県芸術家協会代表

兵庫県

ホルン奏者、日本地域活性化プロジェクト総合プロデューサー、舞台演出家などの肩書を持つ芸術家の中嶋さんは、1983年に芸術家や学者、弁護士など広い分野で活躍する人たちで構成された兵庫県芸術家協会（旧明石芸術家協会）を設立し、大きく３つの活動を行っている。一つは「兵庫県民のための三世代ミュージカルオペラステージ」の開催で、地域の人たちと作り上げる舞台公演。二つ目は「異人館の街に愛の調べチャリティーコンサート」の開催で、今年で34回目を迎え、収益は里親制度を推進する団体へ寄付される。三つめは、地域間交流や人々の絆を深め心を育てる「こころの教育大学」の開催で、趣旨に賛同する企業や、自治体などと連携し、各分野の専門家が集まりコンサートなどイベントを行う。音楽を通じたボランティア活動を続けている。

（推薦者：橋本　明）

この度は、素晴らしい賞をいただきまして、誠に光栄でございます。それと同時に、身の引き締まる思いでいっぱいです。授賞式におきましては、社会貢献支援財団の方々をはじめ、各地で様々な素晴らしい活動をしておられる方々の、貴重なお話しをお伺い致しまして、持続させることの大変さと、大切さを改めて深く感じさせていただきました。

私の活動につきましては、核家族が増加し、世代間交流や、地域との関係性が希薄になっている、といわれている現代において、「地域における人々の心のふれ合いと、世代を超えて、交流のできる温かい場所が欲しい」と切望致しておりました。そんな時に、阪神淡路大震災が起こり、神戸市東灘区にて、被災しました。苦労の末、大震災から１年後に、ようやく明石に移り住んだ私は、大震災を乗り越えて、改めて人々の繋がりと、絆の重要性を心から痛感致しました。そして、こんな時だからこそ芸術の力で人々を励まし、元気づけ、今後の幸せにつながるような事をしなければ！…との熱い思いで明石芸術家協会を、大震災から１年半後に設立致しました。

その後、活動は大きく広がり、2014年に『兵庫県芸術家協会』と改めました。現在、大きくわけて３つの活動を行っています。まず一つは、三世代の心を育てる童話をテーマにしたミュージカルで、世代間交流と、自己表現をしながら、人々が輝く事を目的とする『兵庫県民のための三世代ミュージカルオペラステージ』公演の開催です。台本と歌は、個性を大切にし、出演者一人一人が輝やけるように、全てオリジナルで作成し、歌唱とミュージカル演技は、出演者全員が自信を持って、公演本番のステージに立てるように、基礎からみっちりと指導。そして小道具、大道具、衣装は、出演者とその家族、そして地域の方々も得意分野を活かして、皆で協力をしながら、全力で舞台公演を作り上げて行き、その関わりと、同じ達成感を味わう中で、絆を深めつつ、温かい心を育んでいます。

これまでの参加者の中には、いじめにより心を病んでいた学生さんも病気により障害が残り自信を失っておられたお母さんも三世代ミュージカルにより、自信と元気を取り戻し、ご家族との絆をより一層深められました。この活動を続けてきて、本当に良かった、と改めて思えた瞬間でした。二つ目は、様々な理由で親と一緒に暮らすことができない子供達の幸せを願う『異人館の街に愛の調べチャリティーコンサート』の開催です。幼い里子の女の子との出会いをきっかけにして誕生したこのチャリティーコンサートは、今年で34年目を迎え、収益は、里親制度を推進する公益社団法人家庭養護促進協会を通じて、様々な事情で親と暮らせない子供達に贈り続けていま

す。趣旨に賛同する演奏家達が集結し、地域の人々と共にボランティアとしてチャリティーコンサートに参加。プログラムの終盤には、来場者と心を一つにして四季折々の愛唱歌を歌う温かい雰囲気でのこのチャリティーコンサートは、すでに100回以上開催しています。

子供達へのチャリティーと共に、音楽の技術だけにとどまらず、このような活動を通して、思いやりの心と、助け合う精神を継承する等、次世代の芸術家と、ボランティアの育成も大切にしています。三つ目は、地域間交流と、人々の絆を深めながら、心を育てる重要性を次世代に伝える『こころの教育大学』です。内容は、趣旨に賛同する企業や各県・市・教育委員会と連携をしながら各分野の専門家たちが集結し、命の大切さ、表現する事の素晴らしさ、人は芸術や自然に触れて、感動をしながら、心を育み続ける事が出来る等、大切なことを伝え続けています。

又、「地域活性化プロジェクト」として全国各地（リゾートホテル、国宝のお寺、図書館、水族園、その他）において、芸術家達と、地域の人々が連携して楽しむアート体験型ワークショップや、五感と想像力、感受性を育てる3D 音楽物語。他には医療機関でのホスピタルアート＆コンサート等も開催しています。私は、この度の素晴らしい受賞に際しまして、これまでご指導いただきました恩師、そして活動の趣旨に賛同し、参加ご協力をして下さった方々への感謝の気持を改めてお伝えすると共に、今後も次世代を担う宝である子供達に芸術を通し、夢と希望を提供し又、ボランティアの方達には、人々の幸せを願うと同時に、ご自身の大切な生き甲斐として輝く事のできる社会となりますように、と願っております。

私は今回素晴らしい、賞をいただきました事を節目として、初心を忘れずに、新しい企画と、人々の絆の輪を繋ぎ続けることを大切にして、今後もより一層の努力をしてまいりたいと思っております。そして、なによりも温もりのある家庭と、家族愛を大切にした里親制度が、より多くの国民に知られ、広まり、その重要性を理解されて、一人でも多くの子供達の幸せに繋がることを心より願っております。この度は、素晴らしい賞を頂きまして誠にありがとうございました。心より厚く感謝とお礼を申し上げます。そして、関係者の皆様には、大変にご親切にお世話をしていただきました。本当にありがとうございました。最後になりましたが、貴財団の更なる御発展を、心よりお祈り申し上げます。

P.S「心の教育大学」心に残る冬のイベントとしまして12/15～２泊３日で里親さんと子供達30組を大阪⇔大分の船旅にご招待する事が出来ました。船上コンサートで、目をキラキラと輝かせていた子供達。ほのぼのとした笑顔の里親さん達のお幸せそうな様子が、私の心に残っています。皆さんに、いっぱいの元気をもらう事が出来ました。

▲ひょうご県民のためのミュージカルオペラステージ（脚本・演出・作曲を手掛けています）

▲三世代ミュージックアートフェスティバル（年企業と共催で船内で体感コンサートを開催し毎年里親と里子の家族30人を招待しています）

▲心の教育大学～親と子のキラメキコンサート（全国の保育園や幼稚園へ生演奏とアートワークショップを届けようをテーマに教育機関に協力開催しています）

食育ボランティア「結い」

愛知県

名古屋市中川区で食育活動を行っているボランティアグループ。2007年からは主に中学生以上の知的障がいのある人たちに料理講座を開いている。障がい者が受講できる料理講座は少なく、キャンセル待ちが出るほどの人気。受講者の中にはスーパーのバックヤードに就職している人もいる。保護者からは「自分の出来ることが増え、自立に向けての自信につながっている」「帰宅が遅い日にはご飯の支度がされている」との声もきかれる。現在市内の２か所で開催しており、他にも障がい児の親子クッキング、施設入所者のクラブ活動としての料理講座なども行っている。料理講座以外にも、子どもから高齢者まで「バケツ稲作」の応援、食のおしゃべりを広げている。

（推薦者：社会福祉法人　名古屋市中川区社会福祉協議会）

代　表
福谷　佳子

「授賞式に参加でき、本当によかった」この気持ちを初めに記します。様々な活動をしておられる皆さんにお会いでき、次の活動のヒントを詰め込み家路に着きました。動物病院でのペット同伴避難は、自治体の避難所マニュアル作成に提言。恵まれない子どもたちへの支援は、直に学習・食事提供からではなく口腔歯科から糸口をたどることを地域福祉計画へ提言。失敗を成功へ変化させてしまう発想の転換など・・・このようなすばらしい出会いに感謝です。

食育ボランティア「結い」の名前由来は、日本の農耕生活から生み出された「結い」「出合い」の協同精神からいただきました。「食」は人かんむりに「良」。食事・食卓を見つめる小さなおしゃべりからを目指しました。栄養学はプロに任せ、主婦ボランティアにできる食卓雑学を楽しく語り、食卓を共にして、心の栄養を皆さんと育みたかったのです。近年の家庭の食卓事情を知るたびに、①手を差し伸べられる所はどこか？②生産過程を知ることから命を頂き、命を繋ぐが、命を大切にすることに波及し自立と自律ができる一旦になればいい③現状を否定せず、気付きをきっかけ作りとする。が「結い」の願いです。

知的な障がいを持った方とのクッキングも、愛知県食育ボランティア登録からの障害者基幹相談支援センターとの出会いがなければスタートしていませんでした。今になって思えば当初は余計な力が入り過ぎ、「クッキングに午前中参加すると昼寝が必要！」などと口にしていたことを笑い話にしています。障がいを持った方の行動を驚きに捉えて接しては、障壁を作ることも体感しました。できることからできる方法でスタートさせることで大きなステップを駆け上がるは、私たちが改めて感じさせられたことです。自然体の付き合いが持続の大きな力です。

「食育」は生きる基本となり、さまざまな分野とも協働できます。「出会い」が「出合い」を繋ぎ、「仕合せ」が「幸せ」を紡ぐご縁に、改めて感謝いたします。

代表　福谷　佳子

▲「ダウン症」でもやれます

▲メニューは「巻き寿司」初めての巻き簾

▲メニューは「デコいなり」に煮つけた油あげにひじきご飯を詰めます

▲ご飯ののせ方　具ののせ方初挑戦！

▲料理講座　中川生涯学習センターにて

▲料理講座　熱田生涯学習センターにて

徳田　竜之介

竜之介動物病院
院　長

熊本県

熊本市で動物病院の院長を務める徳田竜之介さんは、東日本大震災の視察で、災害時にペットが置き去りにされていた現状に、日本でのペットの扱いが欧米に比べあまりに劣っていて、災害の際の対応がまったく想定されていない事を痛感。自身の経営する同市内の動物病院を、耐震構造で、専門学校と病院を併設する、西日本一大きな動物病院に建て替えた直後、熊本地震が発生した。発生直後から、SNS 等で受け入れを表明。日が経つにつれ、避難所で肩身の狭い思いでペットと一緒に過ごしていた被災者が噂を聞いて次々と訪れるようになった。１週間断水する中、学生やスタッフの協力もあり、延べ1,500人の被災者と1,000匹のペットを保護した。徳田院長は、熊本県下の避難所のペットをボランティアで往診する中で、動物と飼い主が一緒に避難する方が、人にも世話や散歩を通じて、身体・精神的に大変癒しになり、守るべきペットがいることは生きる力になり、ストレスを和らげることを実感し、同伴避難所の必要性を確信し、ペット同伴避難所を25% 確保すること等を要望する署名を34,000集めた。また、日本のどこでも災害時には、必要な薬品等迅速に届けられるよう、熊本災害動物研究会を発足し、現在18の動物病院が賛同し、独自で横の繋がりを作ることに尽力されている。徳田院長は、日本でもペットと動物の関係は昨今大きく変わってきている、ペットに支えられている人が多くいることも踏まえて、災害時には弱者として対応することが必要と考えている。

（推薦者：株式会社　本山設備）

この度は栄誉ある賞を拝受し、身の引き締まる思いです。

しかしながら、この受賞は私一人の力ではなく、熊本地震を共に乗り越えるために協力してくれたスタッフや、支援者の方々のお陰です。一緒に活動してくれたすべての皆様に心から感謝申し上げます。また、今回の受賞は、動物業界においても大きな一歩であり、人と動物の命が同等であることを認められた証だと、大変嬉しく思います。

私は、東日本大震災のあと、現地を視察で訪れた際に、遠く離れた場所で飼主を待つペットと、避難所で大切なわが子の帰りをひたすら待つ飼主に出会い、「この現状を何とかしたい」と強く思いました。

それから熊本へ戻り、自分の動物病院の建て替えを決意し、災害時のシェルター機能を備えた施設を４年前にオープンしました。自分自身、こんなに早くお役に立つとは正直思ってもみませんでしたが、今回多くの避難者と動物たちを受け入れることができて本当によかったと思っています。

発災当初の院内には、崩れたブロックの下敷きになった子、驚いて道に飛び出して交通事故に遭った子など、外傷性出血の動物たちが次々に運ばれてきて、騒然としていました。そのような中でも、SNS を通じて動物と一緒に避難できる「同伴避難所」として建物を開放していることを発信し、直後から多くのペット連れが集まりました。

当院へたどり着いた一人の避難者の言葉が今でも忘れられません。

「着の身着のまま、大切なわが子を抱えて、たどり着いた避難所でかけられた言葉は、「ペットは外へ…」。この子を置いて自分一人だけ助かろうなんて考えられない」

飼主も私たちも、想いは同じでした。

それから私は、ペット同伴避難所開設を求め、署名活動を行い、34,000人分の署名を国会へ提出し、被災地の第一線で活動した地元の獣医師たちとともに「熊本災害動物研究会」を立ち上げました。現在は、全国18病院とともに、今後いつどこで起きるかわからない災害に備え、情報交換や連携を行っています。

震災を経験して思うことは、日本人の思いやりと助け合いの精神は、世界に誇れるすばらしい宝だということです。震災は辛い経験でしたが、私たちの経験や反省を一人でも多くの方に伝えていくことが、私たちの使命だと考えます。

災害時だからこそ、大切な家族は離れてはいけません。なぜならば、そこには互いに支えあって生きている人と動物がいるからです。これからは社会全体が、「動物は家族の一員であり、社会の一員であること」を認識し、日本人ならではの思いやりの精神をもって、人と動物のより良い共生社会の実現へ向けて、努力することが大切です。私自身もその一人として、これからも微力ながら努力を続けていきたいと思います。

▲地震直後の病院の様子

▲同伴で避難してきた人たちを受け入れた

▲益城往診

▲高く積まれた支援物資のドッグフード

NPO 法人　萌友

宮城県

宮城県仙台市で市内で路上生活を余儀なくしているホームレスの人々に、ホームレス状態からの脱却、社会復帰を目指す支援をしている。またホームレス問題の啓発・研究を通し地域社会に還元することを目的に活動している。2003年に法人格取得。現在、スタッフ３名とボランティアが夜回りや炊き出しを行うとともに、民間アパートを２棟借り上げ（定員14名）、20代から70代の利用者に宿所提供をするなど、辛い思いをして一人で生きていくことが出来ない人を受け入れながら、仙台市と連携し活動を続けている

（推薦者：特定非営利活動法人　ワンファミリー仙台）

理事長
芳賀　ヒロ子

30年前に一人の老人がコインランドリーで夜が更けるのを待つ姿に出会ったことがホームレス支援の始まりでした。杖替りにボロボロのビニール傘を両手に持ちヨロヨロと歩いている姿は衰弱しきった様子、何とかならないかと行政機関に相談しても門前払い。困り果て、当時の勤め先だった病院の医院長に相談し、内科受診をきっかけに施設入所を考えました。ずっと履きっぱなしで肌と一体化した長靴をハサミで切り開き、入浴介助で抱き上げた彼の体重の軽さに心が締め付けられました。彼はアルコール依存治療で入院後施設へ入所となりましたが抗酒剤の服薬を嫌がり脱走、何ヶ月後かにホームレスの状態で亡くなられました。私にとっては失敗した支援となってしまいましたが、彼の支援をする中で様々な事を学ばせて頂きました。その後、夜回りや炊き出しの市民活動を開始、NPO 法人を設立しアパートを借り上げ、無料定額宿泊所の運営事業も始めました。

萌友の支援活動は夜回り・食事会のほかに、自立を希望しアパートに入所した方々の生活にかかわる全てのことが含まれます。生活支援は多種多様に絡まり、社会に旅立つ方の支援に相当のハードルの高さを感じながらの日常です。若くしてすべてのご親戚を亡くす、幼いころに施設に預けられた、親からネグレクトを受けた…心の傷を抱えながらも必死に生きてこられた方々。本人は何故この生きづらさを抱えているのかも気づかずに必死に生きてきた現実があります。アパート契約や仕事に就く時に必要な保証人を立てることも困難になります。一旦路上に出たということ自体、「孤独」との闘いです。このような彼らと共に出会いを大切にし、少しでも今より一歩前に歩き出せるようにお手伝いしております。

初めて体験する授賞式の雰囲気に圧倒されてしまいました。受賞した全53団体の方々の素晴らしい活動・高齢にも係わらず若者をしのぐエネルギーを持って希望を形

にしている姿は、私共の明日への励みとなりました。当団体もまだまだ残された山積の課題を克服しながら、希望の年明けを迎えたいと思いました。この度はこのような機会を作っていただき有難うございました。

理事長　芳賀　ヒロ子

▲入居者・卒業生のお花見

▲ホームレス経験者で亡くなった方々の冥福を祈る「偲ぶ会」

▲入居者・卒業生の秋の遠足（ぶどう狩り）

▲就労支援の墓地掃除

▲高校生もボランティア参加の食事会

山口　武雄

山口獣医科病院
院　長

神奈川県

1974年に山口獣医科病院を開業以来、犬猫の殺処分を減らそうと、年間約6,000頭の犬猫の不妊手術を行っている。同病院を動物愛護団体が開催する里親探しの会場に無償で提供したり、不妊手術後、元の場所に戻せない地域猫のためのシェルターを設置し里親探しも行っている。更に、災害の被災地で被災動物の治療と不妊手術を行っているほか、ブータンやタイでも同様の活動を続けている。

（推薦者：公益財団法人　どうぶつ基金）

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団よりすばらしい大変立派な賞を頂き、光栄に思います。

40年にわたって外猫の不妊手術を介して殺処分をゼロにすると云う目標に向けて活動して来た賜物です。

この賞に負けることなく、これからも活発に活動を続けたいと思います。

西は石垣島、北は北海道、日本全国、国外も依頼があれば出張手術します。当然、当院でも外猫の不妊手術をしています。手術した猫には耳先を桜の花びらのようにＶカットします。これが「さくら猫」です。

さくら猫になると、オス猫同士のケンカがなくなり尿も臭くなくなり、性格も温厚になります。メス猫は子宮の病気が無くなり毛づやも良くなり仔猫の心配はなくなり、自分自身の事だけの心配のみになります。不妊手術は外猫たちの生活環境の改善がみられます。

1988年には犬猫あわせて100万頭の殺処分が2015年では殺処分８万頭にまで減少しました。これも全て不妊手術の効果の表れです。

全ての外猫をさくら猫にすることでさらに殺処分はゼロに近づきます。

今後も活発にこの活動を続けていきたいと思います。

ありがとうございました。

▲スマトラ沖地震後、タイ　プーケット島で技術指導

▲香川県男木島さくらねこ TNR

▲三重県動物愛護推進センター

▲猫に安定剤を注射　三重県動物愛護推進センター

▲徳之島ごとさくらねこ TNR

萱嶋　仁侠

大分県

自衛官として勤務していた1976年から福祉施設などで手品のボランティア活動をはじめた。現在も大分県別府市を拠点に手品、こま回し、変面ショーなどを披露する慰問活動を継続し、2011年には1,000回を達成した。2013年に地震・水害等災害被災地激励芸能集団「絆」を発足させ、県内外で活動している。萱嶋氏個人としては、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本・大分地震後復興チャリティーショーに出演。東日本大震災時には義援金を贈る支援活動を行った。今後も継続的に慰問活動を続けていく。

（推薦者：別府市ボランティア連絡会）

この度は晴れやかな席で「杜会貢献者表彰」という大変名誉ある賞を賜りまして、誠にありがとうございます。

受賞は思いもよらないことで、私のような微々たる活動をしている者でもいいのかと思ったりしましたが、ボランティア活動をされている方々の励みになればと思い推薦して下さった方々に感謝しながら有り難くお受け致しました。

私は自衛官として隊務の傍ら余暇を利用して趣味の手品でボランティア活動を始めました。自衛隊の広報紙で“自衛隊のミスターマリック”と紹介される程広報活動やボランティア活動等で精力的に駆け回り、退職後も手品師は転職と自分の道をつき進んでまいりました。

阪神大震災、東日本大震災、熊本･大分地震と次々と災害に見舞われた地震国日本、手品師の自分にも何かできることがあればと思いながら復興チャリティーショーに出演したり、義援金を贈る支援活動も行いました。

2011年の児童養護施設訪問でボランティア回数1,000回になり喜んでくれる皆様の笑顔に支えられての1,000回達成でした。

2013年（平成25年）の北九州豪雨の後「ストレスで眠ることが出来ない」と語る被災者がいることを知り、芸人仲間に呼びかけ被災地激励ボランティア「豊の国芸能集団『絆』」を立ち揚げて活動を始めました。

2017年５月には熊本大分大震災で最大の被害を受けた熊本市益城町の安永東と木山上辻仮設住宅で激励公演をし、７月の福岡大分集中豪雨の被災地津久見市と日田市を激励公演。これまで被災地激励公演は10ヶ所になりました。

その他にガン患者が集うガンサロン、重症心身障害者・筋ジストロフィー患者が長期入院の病院、障がい者生活支援センター等を定期的に「お笑いマジック」等で訪問しています。芸のジャンルについては、２人の師匠に恵まれて手品、大分県伝承民俗

芸能「豊後錦こま回し」、中国国家機密「変面ショー」、「生きたドジョウすくい」、腹話術、猿回し等でボランティア活動中です。

この度の受賞は身にあまる光栄と肝に銘じ賞に恥じる事のないよう今後も「人の喜びは我が喜び」をモットーとして社会貢献活動に邁進する所存でございます。

最後に素晴らしい表彰式にご招待下さいました安倍昭恵会長はじめ関係皆様方のご健勝と貴財団の益々の御隆盛を心から祈念申し上げます。

誠にありがとうございました。

▲幼稚園で猿回し公演

▲大分県日田市豪雨被災地の子どもたちとふれあいマジック

▲手品から出した生きたドジョウとふれあう福島県の子どもたちと

▲がん患者とその家族の集いで中国文化遺産の変面ショーを披露

▲被災地でボランティア芸能集団「絆」を旗揚げ公演

▲老人ホームで激励マジックショーを披露

飯尾　順子

鹿児島県

鹿児島県出水郡長島町で医院を開業していた夫を長年支え、70歳を目前に同町から特別養護老人施設の建設を要望された。お世話になった地域に恩返ししようと、躊躇していた夫の背中を押し、園長になるための資格を取得して、2000年に町内で２つ目の特別養護老人ホーム「あかね園」を開設した。開園後は、飯尾氏を中心に職員たちの意見を積極的に取り入れ、利用者にとって過ごし易い環境を整え、日々研修を重ね、2007年にはデイサービスセンターも開所。あかね園は県内でも指折りの「離職率」の低さを誇り、町民から信頼され、愛される施設となった。飯尾氏は2015年に園長を退任したが、現在も副園長として園の運営に携わっている。

（推薦者：長島町役場）

11月26日、受賞の歓びを胸に秘めながら空港に向かいました。車椅子を娘たちに押してもらいながら機内に。職員の皆様が、にこにこと笑顔で迎えて下さいました。今まで幾度か空の旅を致しましたが、最高の座席から眺める風景は晴天に恵まれ、美しい雲海と、その雲海の上にそびえ立つ富士山がきれいに見えました。羽田空港着陸前の、大都会の躍動を感じながら式場の帝国ホテルに向かいました。そして社会貢献支援財団の思いやり、おもてなしに感激いたしました。

式場での２日間は、緊張の中、感謝でいっぱいでございました。受賞席に立てる歓びに、私も一所懸命働いたのだと自分に言い聞かせながら受賞席に立ち賞状を頂きました。感動でいっぱいでございます。有難うございました。

園長になってからの15年間の歩みが走馬灯のように浮かんできます。職員と一緒になって試行錯誤し、グループケアに切り替え、自立支援の下、入所者の生活をより良質に、そして家庭生活に近い環境にと進めていきました。自室の他に語らいの場所をつくり、ボランティアの先生方のお手伝いを頂き、お花教室、習字教室を月に２回ずつ行ってきました。又季節を感じて頂こうと、春のお茶会、夏のソーメン流し、そして運動会、秋の長寿まつりではボランティア及び家族との交流を図りました。続いて餅つき、そば打ちと一年を通じて行事を取り入れております。職員たちが賛同し、積極的に入所者をねぎらいながら一所懸命に介護をしてくれました。認知症の入所者の方も多くなり、職員も日々知識と技術向上に努め、よりよい介護を目指し頑張っております。私も職員の一人として意見を申しておりました。

居宅支援事業所の５人のスタッフも町内の高齢者の自宅を訪問し、親身になって相談に応じています。平成19年から始まったデイサービスも、職員たちは試行錯誤しながら、利用者から喜ばれる事業所となるよう活動しています。

風光明媚なところに建つあかね園は明るい老人施設です。入所者と職員が一体となり『謙虚・感謝・思いやり』を理念に、老人介護を進め安心安全を基本に、生きがいと魅力のある生活を送れる施設を目指しております。

最後にあかね園の設立にいい場所と、いろいろな援助を頂きました行政の方に深く感謝いたします。そして、設立の決断をしていただいた理事長にも感謝致します。70歳を機に老人介護に夢と希望を注いだ人生でした。

受賞本当にありがとうございました。

▲あかね園入所者とそーめん流し

▲あかね園の理念　理事長　飯尾一成氏の書

▲送別会に職員から贈られた似顔絵パネル

▲開園４周年記念典での園長挨拶

▲平成16年新年行事　ご主人と共にお屠蘇振舞い

▲平成18年デイサービス開所にあたり紅白餅投げ

▲平成27年園長送別会　職員の人たちに囲まれて

▲趣味の生け花教室

喜納　正博

日本筋ジストロフィー協会
沖縄県支部長
有限会社　フィーチャー企画会長
株式会社　KINA 社長

沖縄県

沖縄県で６人兄弟の末っ子として生まれた喜納さんは、３歳の頃に進行性筋ジストロフィー症と診断された。病気の進行により療養することとなり、沖縄にはない国立療養所に入るため、中学まで過ごした沖縄を離れ鹿児島の病院に入院し、そこで通信教育で高校を卒業した。20歳まで生きられないと告げられていたが、このまま一生を終わらせたくないと、鹿児島県内の障がい者訓練校に入り、簿記１級・珠算２級・ワープロ３級の資格を取得。その後沖縄に戻り結婚、子供を授かったことから、これまで支えられっぱなしだった自身に初めて責任という課題が出来たという。その後、沖縄県内に国立療養所が出来、医療の進歩により存命期間が長くなると、病院で一生を過ごす同病の人たちに、生きる喜びをと、在宅で療養する患者のケアをする会を設立。今年、沖縄で初めての障がい者の為の自立マンションやグループホームが完成した。パソコン教室やデイサービス等を通じて、障がい者支援と介護保険支援を両輪に、利用者目線による障がい者通所施設、老人ホーム、デイサービスなどを運営する総合介護事業所を次々と立ち上げ、障がい者の雇用も積極的に行っている。

（推薦者：一般社団法人　日本筋ジストロフィー協会）

公益財団法人社会貢献支援財団より社会貢献者表彰を頂いたことは、私に自信を与えてくれました。それは筋ジストロフィー症という病のよって他の人とは違った私が、生きる上で思い知らせられてきたからです。

私なんかはとはという気持ちの中、それでも人の役に立ちたいという思いを抱いて、筋ジストロフィー協会の支部長を前任者の病により引き受けて懸命に同じ病の方の悩みや、研究機関に一日も早く治療法を開発してもらえるようと願い、力を尽くしたつもりです。

そして、筋ジス協会では「一日も早く」という合言葉がある様に、これから生まれてくる未来ある子供たちに、私の様に病で辛い思いをさせたくないと思う気持ちで、筋ジス協会の活動にも率先し携わってきました。

思い起こせば、私をこの賞に推薦してくださった日本筋ジストロフィー協会はじめ、主治医やパソコン教室を開業する時に力になってくれた大学の教授など、数え切れない方々の支えと励ましが私の原動力になっていたことは間違いありません。

今回の私の晴れの受賞は、私の人生になくてはならない存在の妻、晴美に見届けて欲しかったのですが、14年前に病で他界しそれはもうかなう事はありません。しかし、私を病院から救い出してくれたかけがえのない妻に、世話になるだけの私が社会貢献者表彰を頂けたことは、妻への恩返しになったのではないかと思います。

多くの方々のお力添えがあり、私一人の力では成しえなかった事を考えるとお世話になった多くの方々と共に頂いた賞であると大変考え深く感謝の念に堪えません。

現在私は、総合介護事業所を経営していますが、お年寄りや障がい者の方々に生き

がいを感じ喜んでもらえるように社員共々頑張っていますが、やはり社員にも支えられています。300名余りの社員が在籍し、ある時「こんな頼りにならない社長でごめんね」と言ったことがあります。するとある社員が「居てくれるだけで十分です」と言ってくれました。この言葉は、私の存在意義を感じた瞬間でもありました。

今後も人との関わりを通して社員と共に力の限り、心の限り社会貢献できるよう邁進していきたいと思います。

今回の受賞は、これから私の生きるビジョンをこれで良かったのだと確信させてくれた社会貢献者表彰でありました。またこれからの大きな後押しにもなり、自信をもって生きていく糧になります。その様に思わせてくれた財団に心より感謝申し上げます。

▲デイケアサービスの職員との会談

▲デイサービスで利用者とコミュニケーション

▲九州地方沖縄県支部筋ジストロフィー協会大会

▲敬老会にて挨拶

▲沖縄県支部筋ジストロフィー協会にて懇親会

▲障がい者生活介護利用者と施設設立祝賀会へ参加

全国ろうあヘルパー連絡協議会

大阪府

会員個々は高齢ろう者の介護サービスに日々従事し、会としてろう者の訪問介護事業所や障がい者地域支援センター、グループホームの設立などに取り組んでいる。1997年に社団法人大阪聴力障害者協会が民間の助成を受けホームヘルパー派遣事業を始めた取組みが、他県にも広がり、その経験を分かち合う「ヘルパーを語る会」が回を重ね、2003年に現在の組織に発展した。現在「ヘルパーを語る会」は「輝け、ろうあヘルパーの明日につなげよう！フォーラム」に改称され、年２回の研修も実施している。近畿、東海、関東、北信越にブロック組織を持って活動している。

（推薦者：中川原町連合町内会）

会　長
廣田　しづえ

この素晴らしい社会貢献者表彰を受与いただき、大変光栄に思います。

ろうあ者（聴覚障害者）ホームヘルパーは介護保険制度前に自らの努力で資格取得した方々がちらほら出てきましたが、実際にはどの事業所もろうあ者を雇うことをしてもらえない時ではありました。

聞こえるホームヘルパーがろうあ者（聴覚障害者）ホームヘルパーに「訪問介護時に医療機関などの連携でできるわけがない、聞こえないホームヘルパーがやれるのか」というような事を言われ、大変悔しい思いをしました。1997年10月に社団法人大阪聴力障害者協会が社会福祉医療事業団の助成金を受け、ろうあ者家庭訪問指導事業の実施を開始しました。そこから、「聞こえなくてもできる」「コミュニケーション手段を工夫してみよう」と現場で頑張ってきました。できない事ではないという自信をもたらし、2000年４月に介護保険制度施行と同時に社団法人大阪聴力障害者協会が訪問介護事業を開始されました。全国各地のろうあ者（聴覚障害者）がホームヘルパー養成講座で手話サークルや手話通訳派遣を利用して次々と資格取得し、聴覚障害者関係団体が京都府、兵庫県、千葉県、愛知県に事業を起こすことができました。新しい職域を切り開き、周囲に認められるようになり、ろうあ者（聴覚障害者）ホームヘルパーたちが、2003年11月に全国的組織を結成しました。

全国ろうあヘルパー連絡協議会の活動は、会員が147名（2017年11月現在）、正会員、賛助会員の年会費が1000円の少ない経費の運営に努力し、「輝け！ろうあヘルパーの明日をつなげよう！フォーラム」＆総会と後期研修会を年に２回開催（全国各地の状況により開催地を決める）新聞は年に２～３回発行、全日本ろうあ連盟福祉基本政策プロジェクトチームのメンバーとして会議に出席し、年に一度の厚生労働省へ要望書を提出しています。また、被災地支援に全国から寄付して頂いた資金を大切に使って、

前泊から準備をし、当日被災者に手作り弁当を無料提供するなど地道に活動して14年目に入っています。そして、この研修会で学んだ情報や知識でろうあ者（聴覚障害者）ホームヘルパー自身が、聴覚障害者協会へ情報提供し、事業を起こすような働きかけをし、ミニデーサービス、地域活動支援センター、就労継続Ｂ型、グループホーム等の事業起こしに協力してきました。

来年が15年目にはいりますが、昨年４月に差別解消法が成立していますが、まだまだ見えない差別があり、2017年２月にはろうあ者（聴覚障害者）がホームヘルパー養成講座の受講申込をした時に、民間養成学校から断られた例（手話通訳派遣費用の負担）がありました。それだけでなく、資質向上のためのレベルアップ講座の受講も手話通訳保障も十分なされていません。ろうあ者（聴覚障害者）のホームヘルパーたちの地位、労働保障も低いことも含めて、「継続は力なり」というように、全国各地でろうあ者が安心して暮らせられる社会資源づくりにその役割を果たせるよう頑張っていきたいと思います。

会長　廣田　しづえ

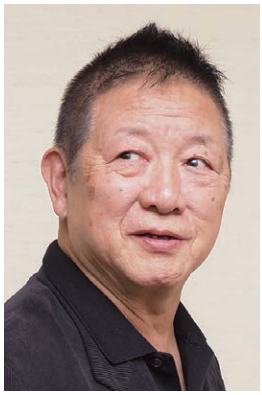
▲全国ろうあヘルパー連絡協議会正式に旗揚げ

▲東北大震災岩手県ろうあ高齢者・敬老の集い手作り弁当配給

▲東北大震災支援宮城県　手作り弁当配給

▲鳥取県中部支援　明日も元気になろう　レクリエーションの様子

特定非営利活動法人　障がい児の積極的な活動を支援する会　にわとりクラブ



理事長
髙橋　義男

北海道

北海道を拠点に、「もっと外に出たい」「何かしたい」と思いながらも自宅にこもりがちな障がいのある子どもたちの活動範囲を広げようと、医師、看護師、養護学校教師、歯科医、福祉施設職員等が集まり、障がいのある子と親や兄弟姉妹が参加する１泊２日のキャンプ「障がい児のアドベンチャースクールいけまぜ夏フェス」を1997年から開催している。年に一度のキャンプの準備を一年がかりで整える大掛かりなイベントで、北海道全域と日本の各地から参加者と参加者を支えるサポーターが集まる。参加者はゲームや運動会、花火、朝のラジオ体操をしたり、開催地の地域の人々が作る夕飯のカレーライスなどを皆で楽しく食べる。当初は札幌市で開催していたが、地域での医療・療育・教育のシステムが連動し、多くの子どもたちの活動が広がっていくことを目的として第６回目から毎年場所を変え、地域行政との連帯のもと19回目の今年は登別市で開催された。

（推薦者：加藤　久実子）

『人間の証明』

重度の障がい児に対する医学的治療は40数年前、北海道においては10年遅れ、30数年前の私の時代から始まった。その頃、療育というものはほとんどなく、そのようななか20年ほど前までは障がい児に対する社会的概念は極めて否定的で、「障がい児は社会の役に立たない、邪魔」とされ、親たちは社会から疎外されていると思っていた。

《障がいは個性だ》《共に生きる》などと言われていても、障がい児は家の中や施設にいて、親は「私たちの気持ちは誰にもわからない、社会は何もしてくれない」と悲観的な気持ちになり、親としての責任をも忘れかけ、諦め、孤立していた。

そんな親たちを間近で見ていた数名の仲間たちが、“子どもたちを社会の中に･･･”という強い信念のもと、「障がい児の積極的な活動を支援する会　にわとりクラブ」はスタートした。新たな「仲間（かぞく）」の始まりである。

子どもたちの能力を知り、それを肌で感じてもらうために、いわゆる「健常社会」とごちゃまぜ・まぜこぜにならなくてはと、ハンディキャップのある子どもたちを外に、みんなの中に、街の中に連れ出し、子どもたちに最低限の《能動と出会い：GO MIX「いけまぜ」》という機会を作った。彼らの意志を積極的に引き出し、生活空間を広げ、能力があることを知ってもらうためには、支援を家族に限定せず、“身体で感じる理解”が出来る人を増やす必要があった。そして「食べる、動く、遊ぶ、交わう、共に」を通して、子どもたちが能動的に感じることを最大の狙いとし、親も含めた周囲の人々の気持ちの開放と、信頼の確立が重要であると考えた。

我々の活動の主体は《障がい児は特別ではないんだ》そして《みんな同じ人間だべや》である。

外に出て、みんなが知り合い、助け合い、お互いを認め合うということ、つまり“互認互助”“人間は集団で生きる動物”で、誰一人として不必要な人間はいないということをみんなが認識し、行動するということは特別なことではなく、「誰もができる」ことなのだ。

次いで、地域格差をなくすことを考えた。ハンディキャップがあるということは誰でもなり得、どの地域でも、どんな人にも生じる普通のことだから、対応は“持ちつ持たれつ”で、誰でも何処でもできる生活のことだという認識を親たちや地域の人々に持ってもらうことにした･･･“地域展開”“地域再生”。そして『仲間（かぞく）』に支えられ、ハンディキャップがあろうがなかろうが『生きていて、良かった』と感じること、それを自らが創るのである･･･『人間の証明』。特に子どもの成長というのは、地域の仲間と出会い、自然の中で色々なことを経験して応用し、考えて、助けてもらって、能力を引き出し、貢献し当たり前に地域に位置づくということなのだ。そして、彼らが未来を創る。

この度、社会貢献者表彰式典に出席の機会をいただき、様々な地域で活動されている皆さまと共に受賞できましたこと、本当にありがとうございました。私たち「にわとりクラブ」は2018年で21年目となります。これからも子どもたちと共に努力を重ね、体育館型能動的展開を続け、互認互助と感謝の気持ちを大事にします。

次回は私たちの実践“にわとりファミリー”で再び参上の予定です･･･宜しくお願いいたします。

理事長　髙橋　義男

▲運動会

▲「川遊び」

▲いけまぜのテーマソング「進け！」を歌ういけまぜ音楽隊

▲いけまぜの会場で高橋理事長と再会の記念撮影

▲閉会式後の集合写真